



開港と日本初の西洋式公園の誕生

江戸時代末期、安政6(1859)年の開港から横浜の都市としての歩みが始まりました。100戸ばかりの寒村が歴史の表舞台に登場したのです。現在の中区関内地区に開港場が設けられ、開港場は外国人居留地と日本人居住地に分けられました。

貿易が盛んになり開港場が賑わうと、土地不足による居住環境の悪化に対し、外国人側から改善要求が高まりました。その中で慶応2(1866)年に大火が発生し、関内の3分の2に近い地域が焼失しました。大火を契機として、同年に幕府側と外国側とで「第3回地所規則(横浜居留地改造及び競馬場・墓地等約書)」が締結され、現在の関内のまちの原型ともいえる整備計画が取り決められました。規則では、山手に外国人用の公園を造営すること、開港場の遊郭を移し跡地を外国人と日本人双方が用いる公園とすることが定められました。日本の都市公

園制度の始まりである「明治6年太政官布達第16号」の7年前のことで、他に、外国人居留地と日本人居住地の間に延焼を防ぐための幅員120フィート(約36m)の大通りを通すこと、競馬場の整備などが取り決められています。

規則の実施は明治政府に引き継がれ、山手公園、横浜公園、日本大通り、根岸競馬場(現在は廃止され根岸森林公園として活用)といった横浜中心部の骨格をなす公園やオープンスペースとなりました。これらの西洋式施設はいずれも日本に導入された初期の事例で、日本の近代化に大きな影響を与えました。

平成21(2009)年には、山手、横浜、根岸森林の3公園が「旧居留地を源として各地に普及した近代娯楽産業発展の歩みを物語る」として近代化産業遺産に認定されました。

Column 01



外国向けのユリの図譜・ヤマユリ 明治32(1899)年刊 (横浜植木株式会社所蔵・横浜開港資料館保管)

明治に横浜に滞在した米国人紀行作家エライザ・R・シドモアは、その美しさに魅了され母国に桜の植樹を提言した。桜も横浜港から海を渡りました。横濱は今日私たちを楽しませてくれる園芸植物にとっても「最初の地」といえます。

日本の植物で、海外から最も注目されたのがユリでした。大輪の花を咲かせる日本のユリは高値で取り引きされ、ユリ根の貿易額のシェアの9割は横浜港が占めるまでになりました。

あるいは出ていったものは数多くありますが、園芸植物もそのひとつです。欧米人にとって、鎖国状態にあった日本は未知の植物の宝庫でした。多くのプラントハンター(植物採集家)が来日し、日本の植物は海を渡っていきました。その後の貿易の拡充により、園芸植物は生糸や茶に比較すれば貿易額こそ少ないものの、横浜港の特徴的な交易品に成長しました。

開港に伴って横浜から入ってきた、あるいは出ていったものは数多くありますが、園芸植物もそのひとつです。欧米人にとって、鎖国状態にあった日本は未知の植物の宝庫でした。多くのプラントハンター(植物採集家)が来日し、日本の植物は海を渡っていきました。その後の貿易の拡充により、園芸植物は生糸や茶に比較すれば貿易額こそ少ないものの、横浜港の特徴的な交易品に成長しました。

園芸植物の玄関口、横浜港

唱しました。大正元(1912)年に横浜港から12種類、3020本の桜の苗木が輸送され、ワシントン・ポトマック河畔一帯に植樹されました。ポトマック河畔は、その後世界的な桜の名所になりました。

横浜港は日本にとって西洋の花の玄関口にもなりました。バラやチューリップなど、今日では馴染みの植物も横浜港から日本に入ってきました。外国人居留地の植栽に用いるため、横浜では早くから西洋の園芸植物の栽培が始まり、明治10(1877)年には温室栽培の技術も伝わりました。その後も横浜では園芸植物の栽培が盛んに行われ、戦前にはカーネーション、戦後はシクラメンやパンジー、ビオラなどの生産において、高いシェアを占めています。

山手公園

明治3年(1870)年に、横浜居留外国人によって造られた日本初の西洋式公園です。当時は外国人専用の公園で、彼らは「ブラフガーデン」と呼んでいました(ブラフは崖の意味で、急傾斜地の多い山手地区を指す)。芝生や花壇、四阿のある園内の様子を遠くから見るだけであった日本人は山手の「花座敷」と呼び、羨望のまなざしを向けていたようです。

山手公園は日本の近代テニス発祥の地でもあり、ヒマラヤスギが日本で最初に植えられた公園でもあります。

日本の公園史の原点として記念すべき公園であり、当時の様子がよく残っていることから公園としては数少ない国の文化財(名勝)に指定されています。



山手公園(明治13(1880)年~明治23(1890)年)

日本大通り

慶応2(1866)年の大火で関内地区の大部分が消失したため、防火帯を兼ねた街路として英国人技師R.H.プラントン(1841-1901年)により設計され、明治12(1879)年までに完成しました。プラントン設計当初は12mの幅員の車道の両側に、3mの歩道と9メートルの植樹帯がある立派な道路で、碎石による路盤と陶管の下水道を備えた日本初の近代街路とされています。

当初の街路樹は関東大震災(P7)によりほとんどが焼失しましたが、昭和4(1929)年関東大震災の復興整備で車道幅員が大幅に拡張され、3年をかけてイチョウが新たに植栽されました。現在樹齢80数年となったイチョウ並木は、横浜を代表する風景のひとつとなっています。



絵葉書 日本大通り 年不詳(1)

根岸競馬場と根岸外国人遊歩道

慶応3(1867)年に完成した日本初の常設西洋式競馬場(仮設では文久2(1862)年の横浜新田競馬場)です。

昭和18(1943)年に戦争のため閉鎖された後、戦後進駐軍に接収されていましたが昭和44(1969)年に返還され、昭和52(1977)年に根岸森林公園として開園しました。J.H.モーガン(1868-1937年)の設計による旧一等馬見所は当時の様子を物語っています。

山手地区と競馬場を結ぶ根岸外国人遊歩道は外国人が「ミシシッピー・ベイ」と呼んだ景勝地・根岸湾を巡る遊歩道で、元治元(1864)年に開通しました。当時は攘夷運動もあり、安全な行楽地が求められていました。



根岸競馬場(大正12(1923)~昭和11(1936)年頃)(2)



絵葉書 横浜公園の噴水池と桜(明治末~大正期)(4)



絵葉書 芝生の野球グラウンド(横浜公園ト花園橋通)(大正期)(3)



絵葉書 横浜公園(大正12(1923)~昭和11(1936)年頃)(3)